

# 俳句における散らし（1）

高木厚人

Atsubito Takagi

作品題名 ちる桜

## ①素材

ちる桜残る桜も散る桜 良寛

句意 今どんなに美しく綺麗に咲いている桜でもいつかは必ず散る。そのことを心得ておくこと。限られた「いのち」の中で、その結果に到るまでを如何に充実したものにし、悔いの残らないようにするかが大切なのだ…。

## ②行構成（I）

寸松庵色紙の散らしをヒントに、主と従の二集団に文字を配した。

## 行構成（II）

一行目は放ち書きで、二行目は連綿で、そして三行目は二行目に添える意識で三行の調和を試みた。

後半集団は前半集団を受けての形だが、まず渴筆の一行目で前半

集団からの、余白を越えての余韻を引き込み、最後「桜」で全体を押さえた。

## ③文字構成

この句には「ちる」が二回、「さくら」が三回出てくる。似た表現は避け、「ちる」は「ちる」と「遅る」、「さくら」は「桜」を二回「さくら」を一回、それぞれ用いた。

## ④線

生命感を出すため筆の毛の弾力を生かす様、常に心掛けた。

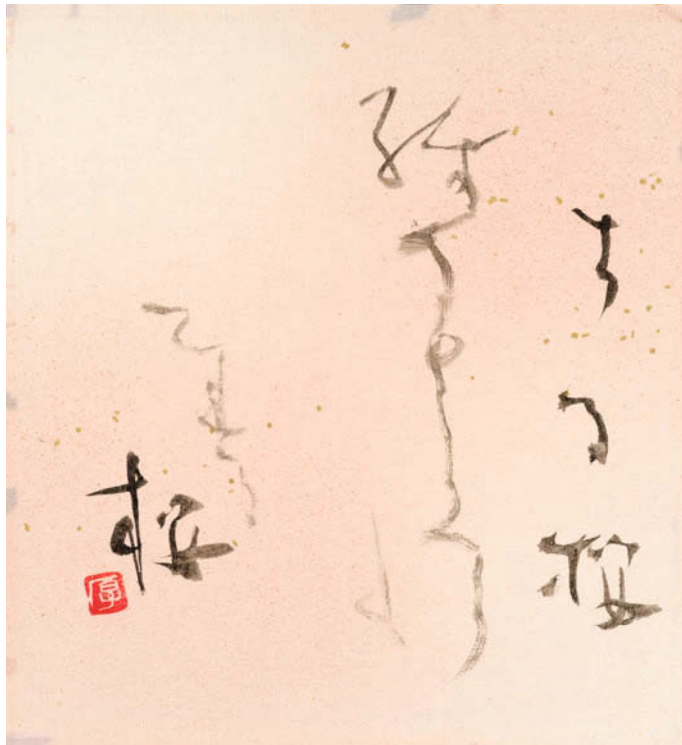
## ⑤墨量・用筆

奥行きのある力強い作品を目ざした。

## ⑥制作意図

九種類の文字しか使っていない。その中で一枚の絵が描ければと願った。筆を進めた。

ちる桜  
残るさくらも  
ちる桜



17.6×16.1cm